

## 彷徨

朝から、ただひたすらに  
どこまでも歩いて行った  
知らず知らずのうちに  
日は暮れてしまっていた

霧が辺りを覆いはじめ  
視界が遮られてゆく  
色彩と言えるものがあるのか  
そのような疑念が生じるほどの平面的区分

(蜘蛛が飛ぼうとして糸を吹き流している)

あらゆる涙の遥か彼方  
あらゆる微笑の遥か彼方  
あらゆる死の遥か彼方

(卑小で愛おしい生命)

たとえ無力であろうと  
蹴飛ばされ、顧みられぬ営みであろうと  
鈴の音ほどの意思はある

拉し去られたものたちが眠る海  
サーバーの奥深く沈む声  
そして僕自身

これ見よがしに  
偽善者が、声高に喚き散らす  
マゾヒスチックな自己顕示欲——

Dよ、お前は哀れではないか  
今の有り様を見るがいい  
何も変わってはいない

このCPUが集め得たもの——  
実は、それは  
たったの1万分の1パーセントに過ぎない

(それは、無数にある入口のごくごく一部)

サプリメントのような——  
そんな「意味」などは存在しない  
温めてくれる何ものかがあればいい

湿った砂が足に纏わりつき  
重力の落とし穴の中へ  
日常というものを引きずり込もうとする

ひた、ひた、という不規則な音  
その水面の下で眠ることを想う  
ぐっすりと

からだの奥底から滲み出るもの  
からだの奥底に共鳴するもの  
それだけを信じるがいい

惨めな虚栄などは棄ててしまえ  
この僕に何を書き記すことができるのか  
それだけだ

(あの蜘蛛は既に居ない)

(2013.6.23)